

右爲檢使、佐橋左源太室七郎左衛門差遣、遂檢分官庫之大繪圖、令點檢之處に、白池は兩國境に記之候、又小谷村百姓名子に成候由雖申之、證據一切無之、剩宗門吟味之節、從松本領主改之、且信州人別水帳に載之候、横川之儀大繪圖之面、全信州之地に有之上は、旁以越後百姓申處、無謂境之儀、西はかくま澤より、戸倉山の麓へ移り、自其山王池へ見通、小倉明神へ相續、雨飾山峯限之、兩國境相定畢、但境を隔有之、兩國之畑反畝改互可相替之、仍爲後證繪圖之面引墨筋各加印判雙方へ下之條、永可相守者也、

元祿十五年壬午年十一月廿二日

戸備前略

地勢氣候

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、中日本武尊進入信濃是國也、山高谷幽翠嶺万重人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、

〔易林本節用集下信濃信州上〕管十郡、南北五日、陰氣深、草不長、海阻而鹽味希也、地深一丈、桑麻厚而帛綿多、大々下國也、

〔本朝事跡考〕信濃國

地高而寒、群川之長大者、其源多自此州流出、岐岨山材木甚多、大者數圍、長者數丈、土民戸々白板扉、屋四面皆板不塗、壁裂、大木爲薪、伐木者、轉自山浮河、以達諸國、

〔千曲之眞砂前編一〕國圖源流并國界風土寒暖

藻鹽草曰、しなの、國、是坂東一高き國なり、甲斐よりも登り、越後よりもものぼる、美濃よりもものぼるといへり、日本事跡考曰、上略地高而寒、群川之長大者、其源多自此國流出、

私曰、此國外ヨリ流レ入ル水無シ、近國ノ大河、此國ヲ川源トス、其大略天龍川ハ諏方湖ヨリ南方遠州ヘ流レ、木曾川ハ鳥居峠ヨリ南ヘ流レテ美濃ヘ落、犀川ハ駒ガ嶽ヨリ出北ヘ流レ、水内郡ニ至リ千曲川ト合シ、千曲川ハ金峯山ヨリ出北流レ、犀川ト合シ下テ、越後新潟ニ至テ海ニ